

それぞれの戦争 ～中谷記代亘さん～

今年は、戦争が終わって79年です。かつての戦争は、教科書や資料でしか触れることのない過去の出来事のように思えます。しかし、その影には一人ひとりの生々しい体験が刻まれています。

私たちの町にも、戦火をくぐり抜けた方々が今も暮らしており、その記憶は貴重な歴史です。今回は、そんな戦争を経験した方々の声をお届けします。

それぞれの体験談には、戦争の真実と共に、私たちが決して忘れてはならない教訓が込められています。

これら証言を通じて、戦争の悲惨さと平和の尊さを再認識し、未来に向けて平和の大切さを次世代に伝える一助となることを願っています。

どうぞ、一人ひとりの体験談に耳を傾け、その中にある思いを感じ取ってください。



▲当時を振り返りながら話をされる中谷さん
特攻隊として出撃する可能性があったという

昭和18(一九四三)年、戦況が悪化する中、兵力不足から大学生が学業を中断して兵役に就くことになりました。「学徒出陣」です。その一部は「特攻隊」として飛行機ごと敵艦に体当たりして亡くなっていました。

今年101歳を迎える中谷記代亘さんも「学徒出陣」として戦争へ駆り出された一人でした。当時21歳。大分師範学校の卒業を半年繰り上げ、茨城県にある土浦海軍航空隊に配属したのが昭和19(一九四四)年10月でした。

学徒出陣の命令を受けたとき、中谷さんは「よし!」と思ったそうです。日本中が戦争一色の中、「不安とかはありませんでした。使命感だけでした。死ぬ覚悟もありました」。

土浦海軍航空隊では、基礎訓練を受けましたが、近くの霞ヶ浦海軍航空隊では、特攻隊養成のための実践訓練が行われていました。中谷さんもその中の一人になる可能性がありました。「もう1年戦争が長引いていたら、特攻隊になっていたかもしれません」

ただ、沖縄への米軍上陸を耳にしたり、相次ぐ空襲や、戦闘機の不足などを見るにつけ、戦争に勝てそうにないことは薄々感じていました。

配属時、とくに印象に残っているのが、昭和20年6月10日の土浦への大空襲です。この日、土浦海軍航空隊とその周辺が米軍のB29爆撃機による大規模な空襲を受け、370人を超える人が亡くなりました。

「その日は、日曜日でした。初めての外出で、軍服も新調して出かけようとしたとき、空襲警報が鳴り始めました。すると、米軍のB29の大編隊が飛来し、近くの予科練(海軍飛行予科練習部)が被害を受けました。いたるところで火の手や煙が上がる中、兵舎と兵舎の間にある塹壕に飛び込んで、どうにか助かることができました」

亡くなった人の中には、中谷さんと一緒の班(22人)で訓練をしていた仲間も含まれていました。

「同じ班の仲間一人が行方不明ということで、付近を探し回りました。病院には、担架代わりのトタンに載せた病人や死体が何体も並んでいました。その中を歩いているとき、負傷し、息も絶え絶えの一人の予科練生が震える手で家族の写真差し出すんですね。その予科練生も亡くなったと思います」。

探していた仲間も遺体として見つかりました。

「道端にトタンに載せられていました。足の骨が出ていて、見るも無残な姿でした」

その2か月後。日本は終戦を迎えます。

「8月15日。その日は、とてもいい天気でした。佐世保への赴任を命ぜられて軍用列車に乗っていたのですが、普段は米軍の艦載機を見かけることが多いのに、この日は何もなく、不思議に思っていました。京都駅に着いたのが昼過ぎで、そのとき、人づてにどうやら戦争に負けたらしいというのを聞きました。だから、玉音放送は直接聞いていません。とっさに思ったのが『そんなこともあるもんか!』でした。そこで、次の大阪には海軍基地があるので、確認してみようということになり、聞いたらやっぱり戦争が終わったということでした」

途中、原爆直後の、広島も通過したが、その記憶はないそう。それほど敗戦の衝撃は大きかったようです。

「分隊を任されていたので、次の任地にいくことで頭がいっぱいというのもありました」

終戦直後は、志佐（長崎県）に配属され、そこにいた230人を故郷に返すのに奔走。敗戦を受け入れるのにもしばらく時間がかかりました。

「あるとき、40代くらいの兵隊が、食事の時急に立ち上がり『敗戦で終わりでもいいのか!』と言ったのを覚えています」

みんな敗戦を受け入れるのに、必死に戦っていました。



▲近所の方から送られた寄せ書き

上部の真ん中あたりには「君が行く 空の神兵 其の門出 送りまつらむ 我等つどい」の文字



▲当時の中谷さん

除隊後、中谷さんは故郷に戻り、昭和20年11月に淮園小学校に赴任。以後、教師を続けてきた。

「子どもたちには戦争の悲惨さをずっと伝えてきました。私自身の反省でもあるのですが、社会の刷り込みの恐ろしさを感じています。小さいころ、日清戦争などがあり、戦争ごっこをよくしていました。そのとき、中国人などを差別的な言葉で呼んでいました。また、私たちは、国際情勢を知らない過ぎた。学生時代、統計的に日本はやがて戦争に負けるといった教授がいましたが、すぐに特高警察に引っ張られていきしました。今でも、戦争を称賛するような人がいるが、戦争は本当に残酷なものです。戦争は絶対にダメです」

先述のように、もう少し戦争が長引いていたら、中谷さんは特攻隊になっていたかもしれない。特攻隊そのものは、非常に気のことと感じる一方で感謝の思いもあるといいます。

航空隊在籍時、中谷さんは、これから特攻の任務につく人と話をすることもありました。その人は、晴れやかな表情で、そして論すように、中谷さんへこう言い残しました。

「君たち以後を頼む。がんばれよ」と。

その言葉は、今も心に深く刻まれています。

中谷さんにとつての戦争は過去の出来事ではありません。

それぞれの戦争　佐藤ハツエさん

一九四〇年代の日本、戦火の中で青春を過ごした若い女性たちの物語があります。「女子挺身隊^{ていしんたい}」として知られる彼女たちは、軍事工場で働き、戦場に向かう兵士たちの支援に尽力しました。しかし、その日々は決して容易なものではありませんでした。今回、お話を伺った佐藤ハツエさん（95歳）もその一人です。

◀ 佐藤ハツエさん 食料難だったことが記憶に残っているという



佐藤さんが、女子挺身隊に参加したのが15歳のとき。昭和18（一九四三）年でした。

「きょうだいが多かったこと（9人）もあり、就職するような感覚でしたね。福岡の軍需工場に行きました。兵隊の靴をつくる工場で、ここ（南山田）からは3人行きました。仕事は朝の8時から夕方5時まで。大きな工業地帯の中にあつたこともあり、よく空襲警報がありましたよ。そのたびに防空壕に避難しました」

寮は6〜7人部屋で同室は鹿児島の人ばかりで「言葉がわからなかった」そう。日曜日は友だちと天神や大宰府に遊びに行った楽しい思い出もあるものの、「故郷が懐かしくてよく泣いていました。父からよく手紙が来ていたのですが、それを見るたびに泣いていました」。

いつも空腹だったといいます。

「食事は芋ごはんか麦ごはん。おかずも干し大根など、質素なものばかりで、魚や肉は食べた記憶がないです。それと大変だったのが、シラミ。着物をめくると、シラミの卵がたくさん、ということがよくありました」

終戦を知ったのは、南山田に帰った後。

「まだ、子どもだったこともあり、思ったのは、もう工場にはいかなくていい、でした」

ただ、戦争が終わっても食べ物には苦労しました。ときには、砂糖やメリケン粉と家にあるものを交換もしました。

相変わらず麦ごはんや、芋ご飯で、「年とり（大晦日）のごちそうも、せいぜい、イワシかメザシでした」。

終戦後は青年学校（勤労青少年のための学校。一九四七年廃止）で学びなおしました。

「戦争中、竹やりを使った訓練もあり、ゆっくり勉強するようなこともありませんでした。本当はもっと勉強したかった。いまの若い人たちには、勉強をしていい社会をつくってほしいですね」

佐藤さんに、戦争のころと今とを比べてどう思いますか、と聞くと返ってきた答えは、「ウラ・オモテ」。まったく違うという意味と思いますが、同じコインのウラ・オモテととらえることもできます。戦時中と現代、その違いは歴然としていますが、両者は同じコインの裏表のように互いに密接に関連しています。戦争の影が色濃く残る過去と、平和を享受する現在。この対比を通じて、私たちはどのような教訓を学び、どのように未来に活かしていくか考えなければなりません。

一九四〇年代の日本。戦争の悲惨さは日常の一部となり、多くの若者が青春を犠牲にしました。佐藤さんが経験した苦労は、戦争の悲劇を超えて現代に語り継がれるべきものです。ただ、佐藤さんは「本当の戦争の辛さというのは、経験してみた人じゃないとわからない」ともいいます。

「だから、絶対に、戦争はあつてはならないのです。食べ物も今は何でもあふれるけど、戦争になると、わからんね・・・」

現代の日本は平和に包まれ、戦争を知らない世代が増えていきます。だが、この平和は同じコインのウラ・オモテのように過去の犠牲の上に築かれたものです。戦争中の経験を知らない現代の私たちにとって、それは教訓として語り継がなければならないものです。

今回は、2人の方に体験談を語っていただきました。引き続き体験を語っていただける方を募集しています。貴重な体験を未来へ伝え、平和の大切さを共有するため、ご協力をお願いします。語って良いという方、身近にそういう方がいらっしゃる場合は、九重町役場情報デジタル推進課までご連絡ください。